HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	イタリア語と日本語の過去時制に関する対照研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	CESPA, Marianna
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11630号
Issue Date	2015-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58741
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Cespa_Marianna_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　チェスパ　マリアンナ

主査　准教授　藤田　健
審査委員　副査　教　授　清水　誠
副査　教　授　佐藤　知己

学位論文題名
イタリア語と日本語の過去時制に関する対照研究

本論文は、イタリア語と日本語における過去を表す時制について比較対照的考察を行い、両言語の当該形式に見られる共通点と相違点を明らかにすると同時に、従来の研究では扱われていない用法に対して体系的な説明を与えることを目的とするものである。

イタリア語は時制体系が複雑な言語であるが、本論文は四つの過去時制と過去を表す機能も有する現在形について、「完了性」という概念を軸にその用法を分析する。先行研究の実例に加え、イタリア語ネイティブとして作例した新たなデータについて詳細な検討を行い、各時制が完了性に関してどのように特徴づけられるかを明らかにし、新たな視点からの各時制の位置づけを明確に提示している。

日本語の時制については膨大な先行研究が存在し、それぞれ独自の方法論が展開されていることから、研究者の間で統一的な見解が共有されているとは言い難い状況にある。本論文は、従来の多くの日本語研究に不足している対照言語学的視点から日本語の過去時制を考察する。時制体系の豊富なイタリア語と日本語との本格的な対照研究は本論文が最初のものであり、新たな視点を提示することに成功している。イタリア語の分析において軸となった完了性という概念をもとに、日本人インフォーマントを通じて得られた実例を含む豊富な日本語のデータを綿密に分析し、各形式の相互関係を明解に説明している。

本論文は、時制形式を論じる場合に、当該形態素の意味機能のみを考察するのでは不十分で、用いられる動詞の語彙的意味特性、共起する副詞等の要素、文脈等の複合的な要因を考慮に入れなければ、その本質を解明することはできないという一貫した立場から議論が展開されている。

以上の総括に基づき、審査委員会では本論文に対して、次のように評価した。本論文は、イタリア語と日本語における過去を表す時制形式のほぼすべてを考察の対象とし、完了性という一貫したアスペクト的視点から両言語のデータを詳細に分析した研究である。イタリア語の従来の時制研究は、テンスの視点から主に分析されていたために、本論文が新たに提示したデータを十分に説明することができないものであった。アスペクトという視点を中心にすえ、明確な概念を用いることによって、イタリア語の複雑な時制形式のもつそれぞれの機能が体系的かつ簡明に説明されている。日本語の従来の時制研究では、日本語の事実のみを考察しているものが大半であるために、言語普遍的な観点から日本語の当該形式を捉えることが不可能であった。本論文はイタリア語の時制形式の分析で用いられた概念や手法を、日本語の時制形式にも適用することによって、従来の研究には発見できなかった特徴を明らかにし、その形式の本質を通言語的な視点で捉えることに成功していると言える。また、意味論、形態論、統語論、談話文法、語用論といった言語学の諸領域を横断する形で分析が進められ、両言語の時制形式の複合的な性質を明示することが可能となっている。テンス・アスペクト研究に限らず、イタリア語と日本語の対照研究の分野において、本論文ほど広い範囲で分析を進めている研究は見出せず、本論文は本格的な日伊対照言語学研究の先駆け的存在であると位置づけることができる。

審査委員会において、特に議論が展開された点は以下の通りである。本論文は、言語学の領域において重要ではあるが極めて分析が困難である時制形式というテーマに果敢に取り組んだ意欲的な

研究である。膨大な先行研究が存在するにもかかわらず、オリジナリティーに富む研究成果が得られたのは、イタリア語と日本語という、類型的にかなり異なる言語間の対照研究という難易度の高い方法論を採用したためであると言える。その議論の展開は極めて論理的であり、データの分析姿勢も思弁に陥ることなく、抽象的な概念を提示する場合でも常に言語事実を第一にすえた実践的な姿勢を貫いており、言語研究として理想的なものであるとみとめられる。

ただし、提示された用語の定義が必ずしも十分ではないために、論旨が明確に伝わりにくい箇所が複数見られたことや、ネイティブスピーカーではない日本語の言語事実については提示の仕方に再考の余地があることは否めない。また、副詞の分析においてモダリティー的要素を十分に考慮に入れていないために、その分析が一面的なものにとどまっているという印象を与えている。しかし、このような問題点は今後のさらなる研究の展開によって十分克服されるものであり、日伊対照言語学におけるパイオニア的研究とみなされる本論文の価値を決して損なうものではないと判断される。

以上の審査の結果、当審査委員会は全員一致して、本論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしい学問的水準にあるとの見解に達した。